



Title	塗り替えられたウォールペインティングから見るフィリピンの塗料の使用と流通 : Boljoon Church のウォールペインティングへの分光光学実験と文献調査を通して
Author(s)	李, 岢
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100485
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

塗り替えられたウォールペインティングから見るフィリピンの塗料の使用と流通

—Boljoon Church のウォールペインティングへの分光光学実験と文献調査を通して—

李崙 (外国学・M1)

1. はじめに

今まで、文化人類学的な研究方法を色彩と結びつけ、モノの研究として扱うという発想を持っていた。異なる景観が成り立つためには、人々の色彩の使い方が重要な要素の一つとなっている。同じ文化背景を共有する人々が、特定の色に対する認知とコンテキストを共有するのは当然のようなことだろう。それならば、色彩に関する感覚と地域文化の分析を通して、人々の行為実践と生活の中で運用される彩色の裏にどのような歴史と文化が反映されているかを探ることができるだろうか。さらに、東南アジアの地域間で行われた物の交換を通じて、色彩の運用と文化背景を共有するエスニック・グループに属する人々の感覚と行動の関連性を見出すことができるであろう。ただし、この色彩感覚は抽象的なものであるため、測定するのは容易ではない。したがって、色の実体化に関わる塗料や色材についての研究を通じて、人とモノの移動が人々の好みや感覚、そして実際の景観をどのように変えたのかを明らかにしたい。その中で、物質に関わる研究には、固有の人文的研究方法だけでは補えない部分がある。そこで、本研究では分光光学の実験と分析手法を採用し、文理融合の研究方法によって、色彩感覚の生産の背後にあるメカニズムや物質要素を探究することを目指す。

2. 研究目的

本論は、文献調査や分光光学の実験等の方法を用いて、セブ島にある Boljoon Church という教会の一部のウォールペインティングの塗料や模様を研究対象とし、19～20 世紀のフィリピンにおける塗料の使用と流通についての推論を立てることを目的とする。

3. 背景

3.1 ボルホーンの貿易歴史 (略)

3.2 セブの貿易 (略)

3.3 フィリピンの色材使用

Modern Asian Art において、Clark (1998: 12-13) は、地理的な場所がアジアにおけるキャンバス絵画の実践の習得に直接的な影響を与えたと主張している。フィリピンでは、西洋の芸術材料と技法はスペインの宣教師によってもたらした。17 世紀には、アウグスティニアン宣教師たちがマニラの中国系メスティーソコミュニティに対して絵画の授業を提供していたとされる。

Tse と Labrador は材料と技法の観点から、初期のパネル絵画におけるフィリピンの絵具使用を議論した。フィリピンのボホールにおけるパネル絵画実践に対する考察から、初期のパネル絵画では、20 世紀初頭の絵画よりも多くの異なる素材が使用されていることを明らかに示した。芸術的議論の仲介者としてのスペインの宣教師たち、ボホールの孤立した地理的位置、中国のアート実践者たち、そしてヨーロッパのアート材料への限られた貿易とアクセスが挙げられる。Tse, Labrador, Sloggett (2009) によって、中国の顔料が使用された可能性が高いのは、中国人による貿易活動や、フィリピンにおける芸術的实践への直接的な関与があったためであると示した。

したがって、最初にヨーロッパなどから輸入された材料や絵画技法が、初期の油絵、パネル画、壁画などに使用されたと推測できる。しかし、フィリピンは熱帯・亜熱帯地域に位置しており、熱帯モンスーン気候に分類され、主に高温多湿で、明確な雨季と乾季が存在する気候である。そのため、温度や湿度などの自然環境条件は、顔料の原産地とは異なり、顔料や塗料等は元々の色や状態を長期間維持することが難しい。修道院の2階のウォールペインティングに、上塗りレイ

ヤーの損傷が最もひどい部分は、2階のバルコニー近くにある窓側で、直射日光や風雨の影響を受けやすい場所、またはキッチンに近いレストランの壁の隅部分でした。ボルホーン教会の壁画は、時間が経つにつれて色あせ、元々の雲雷文様のデザインは徐々に損なわれ、教会の火災や再建を経て、新たに単色の上塗りが塗り替えられた可能性がある。

3.4 Román Ongpin, E182 (略)

4. 研究対象

セブ島のボルホーンに位置するボルホーン教会 (Boljoon Church) は、別名パトロシニオ・デ・マリア教会 (Patrocinio de Maria Church) としても知られ、セブ市のサント・ニーニョ教会 (Church of Santo Niño) に次いで、セブで最も古いアウグスティノ (Augustinian) 教会の一つであり、貴重な建築遺産とされる。2001年にはフィリピン国立博物館により国家文化財に指定され、フィリピンのバロック教会の一つとして、UNESCO 世界遺産登録の候補にも挙げられていた。

教会の建設と修復の歴史から見ると、修道院二階にあるウォールペインティングが 1920 年代の修復が行われた時に塗り直しされた可能性がある。ボルホーン教会の修道院 (Convent) の 2 階では、ほとんどの壁面の下部分が同じ模様のウォールペインティングで覆われ、その上に純色のペンキが塗替えられていた。本研究では、2 階ホール南側壁にあるウォールペインティングの一部を対象に、主に分光学的実験が行われた。



図1 Boljoon 教会

5. 研究方法

2024 年 8 月 13 日にボルホーン教会に到着し、ボルホーン博物館所蔵した陶磁器などの遺物の分光光学実験を行った。8 月 14 日に教会 2 階にあるウォールペインティングへの分光光学実験を行った。

実験中は、2 階のホールのドアと窓を閉め、他の外部光源が設備の撮影に影響を与えないようにして、可能な限り光源を遮断した。壁から一定の距離の固定位置で設備を設け、固定光源と撮影用のレンズを設置した。レンズの正面に異なる色のフィルターを交換し、各フィルターを装着した状態で実験画像を撮影し、保存する。本実験で使用したフィルターの型番は以下の通りである：NF, U340, R60, R72, O56, Y46, B460, IR85, 510, 880, 1030 ; Y46_UV01, Y46_UV02 (ルミネッセンスライト)。実験で取った写真画像をまたソフトウェア (例：IMAGEJ) で再処理や分析をする。その後の処理や分析を容易にするため、tif と jpeg の両方のフォーマットで保存されている。

また、スペイン宣教師によって書かれたフィリピンに関する歴史文献を一部調べ、調査地の塗料の使用の歴史とその流通をできるだけ明らかにしようとする。

5.1 画像データについて

元の下塗りレイヤーの色は、藍色と緑色の線状パターンとして残る痕跡に見ることができる。しかし、その後に施された塗装のレイヤーは、緑がかった青色の単色ベタ塗りパターンが示されている。

分光光学実験で取得した画像でわかるように、元のペンキレイヤーは剥離後も肉眼で見える模様が残っており、これは職人が使用した塗料や技術に関係していると思われる。しかし、その上の一層のペンキレイヤーは剥離後にあまり痕跡を残

さず、場所によっては元の塗膜の模様が完全に露出していることさえある。また、ルミネセンスライトの照射下では、元のペンキのライン部分に緑色の蛍光のような物質が見える。

元のレイヤーと既存のレイヤーの色のデジタルデータを確認するには、画像をより詳細に分光学的分析する必要があるが、基本的にここから推測できるのは、二つのペンキレイヤーは異なる時期に異なる色と成分の塗料を使って塗られたということである。異なる時期に異なる色と絵具を選択したことは、何世紀をわたった世界貿易の進展と伴い、絵具の発展や顔料等の製品の流通と交換が盛んであったことを反映している。



図2 実験対象のウォールペインティング

5.2 実験画像(略)

5.3 ウォールペインティングの文様

元のレイヤーのウォールペインティング文様は、中国の伝統的な文様である雲雷文に類似しており、18世紀の修道院を建造する時に雇われた中国人労働者によって描かれたものと推測できる。雲雷文は古代中国の幾何学文様の一種である。雲雷文は、新石器時代後期に初めて出現した、連続した「回」状の線で構成される幾何学文様で、柔らかな「回」状の線（曇文）と、正方形に角度をつけた「回」状の線（雷文）で構成され、雲雷文は両者の総称であり、「回」状の連続した線で構成されるという基本的な特徴がある。雲雷文の最も古典的な様式は青銅器の雲雷文である。そのほか、装飾文様としても陶器や漆器、木彫、建築などに多く用いられていた。ボルホーン教会のウォールペインティングには四角いの雲雷文が描かれていると推測する。

フィリピン芸術と中国との関係は深く、長い歴史がある。特に、条約港で制作された絵画やガラス絵がフィリピンに広まり、また、典型的な職業を描いた「ティポス・デル・pais (Tipos del Pais) [Tipos del País (ティポス・デル・pais) は文字どおり「さまざまな生国(しょうごく＝生まれ故郷)」を意味し、植民地時代フィリピンの社会階層と職業を示す水彩画のスタイル。衣装を題材に、民族を描きわけようとした。]」に影響を与えた。1580年代からの中国系職人が宗教との関与があって、中国系はカトリックのイメージを再現する技術を習得し、その才能はカトリックの司祭たちに広く認識されていた。1734年までに、「約380のメスティーン家族が絵画、彫刻、大工仕事、鍛冶仕事に従事していた」と記録されている(Clark, 2018)。ゆえに、ボルホーン修道院の建造や内装工事に参与する可能性がある。教会関係者に確認したところ、このウォールペインティングは中国系ペンキ職人によって描かれたものだが、具体的な人名をたどるのは難しいとのことだった。



図3 修道院内文様

6. 予想される成果と今後の課題

ボルホオン教会の内壁に描かれたウォールペインティングを対象として、文献調査と分光光学実験と分析を組み合わせる手法によって、19世紀から20世紀にかけてのセブの塗料、色材の使用や流通について、合理的な仮説や推測を立てることを試みる。

今までの研究には塗料の歴史文献がまだ不十分であり、塗料や色材の貿易とペンキ職人の移動に関わる資料を探る必要がある。また、分光光学実験で得る画像データをさらなる分析処理を行う予定である。

参考文献

- Amy Butler Greenfield.(2006). *A Perfect Red: Empire, Espionage, and the Quest for the Color of Desire*. Harper Perennial.
- Boljoon Church Complex.(2021). *The Patrocinio De Maria Church In Boljoon, Cebu*. The National Museum of the Philippines.
- John Clark.(2018). *Colonial Art as a Space of the Asian Modern, Charting Thoughts: Essays on Art in Southeast Asia*. National Gallery Singapore.44-59.
- John Clark.(1998). *Modern Asian Art*. University of Hawaii Press.
- Joyce H. T., & Tiarna Doherty, & Gunnar Heydenreich, & Jacqueline Ridge.(2008). *Preparation for painting: the artist's choice and its consequences*. London: Archetype Publications Ltd.161-170.
- Nicole Tse & Ana Labrador & Robyn Sloggett.(2009). *Painting Practice in the Philippines: Two Institutionalised Practices and Their Materials and Techniques*. University of Melbourne.
- Nicole Tse, & Robyn Sloggett. (2008). *Southeast Asian oil paintings: supports and preparatory layers*. London: Archetype Publications Ltd.. 147-155.
- Paul Gerschwiler.(2009). *Bolhoon: A Cultural Sketch*. The Foundry.